**降誕前第８主日　召天者記念礼拝説教　　　　　　　　　　　　　　　2024年11月3日**

**「もう泣かなくともよい」**

**哀歌３章22～24節**

**3:22 主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。**

**3:23 それは朝ごとに新たになる。「あなたの真実はそれほど深い。**

**3:24 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い／わたしは主を待ち望む。**

**ルカによる福音書７章11～17節**

**7:11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。**

**7:12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。**

**7:13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。**

**7:14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。**

**7:15 すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。**

**7:16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。**

**7:17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。**



**本日は召天者記念礼拝です。私たち諏訪教会を通って神様の元に召された信仰の先達の在りし日のお姿を覚えて偲ぶ礼拝です。それと同時にご家族の慰めを祈る礼拝でもあります。**

**皆さんのお手元に「召天者名簿」があると思います。そこには、Yさんから、つい先日天に召されご葬儀が執り行われましたCさんまで、過去10年間に天に召された19名の方々のお名前が記されてあります。そのお一人お一人のお名前を見ると、在りし日共に教会生活信仰生活を送ったお姿が思い出されます。**

**これは昨年も申し上げましたが、召天者記念礼拝は、私たちの信仰の先達の在りし日の信仰の姿を思うと共に、その信仰が継承されていくことを祈り願う大切な礼拝です。先に神様の元に召された方々の信仰を今教会に連なる私たちに、また召された方々のご家族に信仰が受け継がれ、さらには後の世代に受け継がれていくことをこの礼拝を通して祈り願うのです。それは、〇〇さんの信仰のお姿を思い出して、私たちが襟を正される思いがすると共に、信仰が受け継がれて行って欲しいと祈るのです。**

**その召天者記念礼拝で私たちに与えられました聖書箇所は、ルカによる福音書のいわゆる「ナインのやもめ」と呼ばれている物語です。イエス様と弟子たちがガリラヤ地方のナインという町に行かれました。するとある葬儀の列に出会われたのです。どうやらこれから遺体を運んで埋葬をするところであったようです。「が担ぎ出されるところだった」と聖書に書かれていますが、この当時はといっても私たちが想像するような立派なではありません。何か担架なようなものに載せて運ばれていたと考えられています。遺体は布でぐるぐる巻きにされていたかもしれませんが、イエス様は一目見て若い男性が死んで運ばれていると気づかれたのでしょう。**

**その傍らには母親と思われる女性が恐らくは周りの人々に支えられなければ歩くこともできない悲しみに打ちひしがれた様子で、人目もはばからずに大きな声で泣き叫んでいたのでしょう。彼女はやもめでした。夫に先立たれた女性です。彼女にとって一人息子は夫の生き写しのようなものでした。やもめの女性が女手一つで子供を育てるのは今以上に厳しい時代です。貧しさに耐えて彼女は最愛の息子を育て上げたのです。そしてその息子が恐らくは働ける年齢になって彼女を支えていたと思われるのです。その最愛の一人息子が死んでしまったのです。その理由は聖書に記されていませんのでわかりません。病気か事故かはわかりませんが、一人息子は母を残して旅立ってしまったのです。「ご主人に先立たれて、最愛の息子さんにも先立たれるなんてね。可哀そうな奥さんだね。神様はなんてむごいことをされるんだろうね。」彼女の様子を見て町の人々もまた涙を流してそのようなことを話していたのでしょう。子どもに先立たれるのは親にとって特に母親にとって自分の内臓をもぎ取られるような辛いものというのを聞いたことがあります。まさにやもめの女性は内臓がもぎ取られるような、引き裂かれるような大きな大きな悲しみに打ちひしがれていたのです。**

**イエス様はその様子を御覧になられたのです。見ず知らずの女性の悲しみに、イエス様の方から寄り添って下さったのです。**

**「主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。」（13節）**

**「憐れに思う」はそのまさに「内臓」という言葉に由来していて、内臓がもぎ取られるような、引き裂かれるような大きな大きな悲しみの気持ちにイエス様もなって下さったのです。ただ、その場に居合わせただけなのに、やもめの女性と同じ悲しみの気持ちになって下さったのです。**

**「もう泣かなくともよい」イエス様はこう声を掛けられました。「もう泣かなくともよい」この言葉を聞くと、「あなたはもう十分泣いたんだから。これ以上泣かなくてもいいんだよ」という慰めの言葉のニュアンスに聞こえる言葉です。実は、聖書の元の言葉を直訳すると「泣くな」なのです。英語の聖書では"Don't cry."と訳されています。「泣くな」です。一見するととても冷たい言葉のように思えます。死別の悲しみに打ちひしがれて泣いている女性に「泣くな」と言われるのです。もし私たちが愛する家族を天に送って悲しみに打ちひしがれている時に「泣くな」と言われたらどう思うでしょうか。葬儀の場で悲しみに暮れている時に「いつまでも泣いていたら亡くなった人が悲しむよ。もっとしっかりしなきゃだめよ。」と声を掛ける人がいます。その人は励まして早く立ち上がって欲しいという願いからそのように声を掛けるのでしょうが、言われたほうからするととても辛く厳しい言葉だと思います。**

**私は3年前に長年介護をしてきた妻の父を天に送りました。葬儀の時に掛けていただいた言葉で一番心に響いたのが同じように介護の経験がある方から「介護お疲れさまでした」の言葉でした。その言葉を掛けていただいた時にピンと張りつめていた気持ちが一気に解放されたような気がしました。そして、介護の経験を生かして前を向いて歩いていきたいと思いました。**

**「もう泣かなくともよい」「泣くな」イエス様のこの言葉は、もちろん「いつまで泣いているんだ」という厳しい励ましの言葉ではありません。「泣くな」と言われる。それはイエス様がこれから彼女が泣く必要性をなくして下さるからです。「泣くな」は「泣く必要がない」なのです。彼女の悲しみは愛する独り息子の死です。イエス様はその悲しみの原因の死を打ち破って下さるのです。**

**イエス様は言われます。「若者よ、あなたに言う。起きなさい」すると死んだ一人息子が起き上がって話し始めたのです。イエス様はやもめの最愛の一人息子を死から甦らせてくださり彼女に息子をお返しになったのです。そのことによってまさに彼女は泣く必要性がなくなったのです。その悲しみは打ち破られて喜びの涙があふれたことでしょう。**

**この物語において大切なのが16・17節に記されている、この出来事を間近で体験した人々の反応です。人々は皆恐れを抱き、神様を讃美します。そして言います「大預言者が我々の間に現れた」さらに「神はその民を心にかけてくださった」です。「大預言者が我々の間に現れた」の「現れた」という言葉は元の言葉では、イエス様が死んだ若者に「起きなさい」と言われた言葉と同じ言葉です。そしてこの言葉には「復活する」という意味があります。「若者よ、あなたに言う。復活しなさい」と言われたイエス様の奇跡を見た人々は「大預言者が我々の間に復活した」と讃美をするのです。**

**さらに「神はその民を心にかけてくださった」の「心にかけてくださった」は、同じルカ福音書1：68「主はその民を訪れて解放し」の「訪れ」と同じ単語です。ですから、「神はその民を心にかけてくださった」の讃美は「神はその民を訪れてくださった」の讃美ということができるのです。つまりイエス様が若者を生き返らせる奇跡を見た人々は、「大預言者が我々の間に復活した」「神はその民を訪れてくださった」と讃美をしたいうことができるのです。そしてこれが何を意味しているかというと、「神が私たちに訪れてくださった」「大預言者であり救い主であるイエス・キリストが私たちの間に復活された」それはつまり「救い主イエス様が私たちのもとに来て下さり十字架上で死んで復活された」というイエス様を讃美をするその讃美の声が、ユダヤだけでなく周りの地方一体にさらに世界中に広がっていくことを示しているということができるのです。**

**死という現実を前にして私たち人間は無力です。生まれて来た人間は必ず死ななければなりません。死の別れを経験しなければならないのです。そして、死の現実を受け入れて悲しみを乗り越えなければなりません。召天者名簿の19名の方々にはそれぞれの死があり、それぞれの悲しみがあります。特に愛するご家族にとりまして内臓がもぎ取られるような、引き裂かれるような大きな大きな悲しみの気持ちがあったでしょうし、今もその悲しみが消えない方もおられるでしょう。**

**ナインのやもめの愛する独り息子の死、私はこれは父なる神様の最愛の一人息子であるイエス様の死を表しているのかなと思いました。愛する独り息子が私たち人間の罪を全て背負って十字上で死ななければならない。それは父なる神様にとって内臓がもぎ取られるような、引き裂かれるような大きな大きな悲しみの気持ちでありました。それが神の憐みであり、そこまでして神様は私たちを愛して下さっているのです。そして「起きよ」「復活せよ」とイエス様に声を掛けて下さりイエス様は死を打ち破って復活されたのです。**

**イエス様の死の前にお墓の前で涙を流すマグダラのマリアに復活されたイエス様は「なぜ泣いているのか」と声を掛けて下さいました（ヨハネ20：13）。「なぜ泣いているのか」「泣かなくともよい」それは「私は死を打ち破って復活した。だから泣く必要はない。あなたの悲しみは喜びに変わるのだ。」との呼びかけです。マリアは弟子たちのもとに走って行って復活されたイエス様に出会った喜びを告げたのです。そしてその讃美の声は弟子たちに教会にそして世界中に広がって行ったのです。「主は私たちのもとに来て下さった。主は十字架にかかって死んでくださり復活された」「主は甦られた」この讃美の声が今時を同じくして世界中の教会で響き渡っているのです。**

**私たちは死別の悲しみはあります。しかし、私たちの歩みは死で終わりではありません。死の先になお希望があるのです。復活の希望があるのです。その希望を抱いて私たちの信仰の先達たちは主のもとで平安の内に死の眠りについておられるのです。私たちは信仰の先達たちとの再会の希望と持つと共に、私たちも復活の恵みに預かる復活の希望を抱いて信仰の旅路を歩んでいきましょう。**